慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	簿記と会計
Sub Title	Bookkeeping and accounting or accountancy
Author	友岡, 賛(Tomooka, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2015
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.57, No.6 (2015. 2) ,p.25- 35
JaLC DOI	
Abstract	「簿記」と「会計」ないし「簿記学(簿記論)」と「会計学」の関係ないし異同を吟味する。
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20150200-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第57巻第6号
2015年 2 月

2015年1月8日掲載承認

簿記と会計

友　岡　　賛

＜要　　約＞
「簿記」と「会計」ないし「簿記学（簿記論）」と「会計学」の関係ないし異同を吟味する。

＜キーワード＞
会計，会計学，技術，技術と理論，記帳技術論，記録，記録と報告，形式と内容，財務諸表，説明，伝達，評価論，報告，簿記，簿記学，簿記論，理論

のっけから本稿の論点それ自体に否定的な見解を紹介するのもどうかとは思うが，W. A. ペートンは次のように述べている。

> 「特定の事業に影響を及ぼすすべての観察可能な出来事について体系的な記録が行われなければならない。事業上の事象について日記が付けられ，そのデータが分類・記録されなければならない。会計のこの部分は一般に「簿記」と呼ばれ，むろん，それは事業の取引を分析し，記録するという日常的なプロセスである。概して簿記と会計を明確に区別しようとすることはまったく無意味である。もしも簿記を可能な限り広義に捉えるならば，これらの語はほぼ同義となる。しかしながら，一般的な用法の場合，「会計」という語の方がこの領域全体の名称としては相応しく，また，「簿記」はその重要不可欠な部分として捉えられる[1)]」。

まずは「まったく無意味」と断じている[2)]。

＜引用について＞
原文における太文字表記や圏点やルビの類いはこれを省略した。したがって，引用文におけるこの類いのものはすべて筆者（友岡）による。

1）　William Andrew Paton, *Accounting Theory: With Special Reference to the Corporate Enterprise*, 1922, pp. 4–5.

リトルトンの所説

ペートンといえば，リトルトンである。

A. C. リトルトンの *Accounting Evolution to 1900* は ‘Part I　The Evolution of Double-Entry Bookkeeping’ と ‘Part II　The Expansion of Bookkeeping into Accountancy’[3] の 2 部からなっているが，その訳書は「前篇　複式簿記の生成と発展」と「後篇　簿記より会計学への発展[4]」としており，けだし，これはリトルトンが「‘Accountancy’ は会計の知的分野を意味し，‘Accounting’ は，この知的分野における秩序的活動を意味する[5]」としていることによっている。

さて，まず「前篇　複式簿記の生成と発展」は次のように述べている。

「パツィオロの簿記書を注意してよむと，簿記の基本構造は，そのころと今日とで，ほとんどちがわないことを知って一驚をきつするのである[6]」。

「たしかに，或る種の簿記実務はパツィオロ時代から今日まで四百年以上も変ることなく続いている。だが Crivelli の飜訳書を通じてパツィオロの著書にふかく思いをめぐらしてみると，彼の著書にもつとも缺ている点は，おそらくは現代的の「理論」に関する記述であろう。当時の簿記は事実上記録手続に終始していた。なぜこうするのかという理由を骨をおつて説明しなければならない必要もなかつたし，勘定の分類を理論的に構成する必要もなかつたのである[7]」。

「パツィオロの著書でまつたくみられないものに財務表の問題がある。彼が財務表にふれていない理由は容易に理解し得られる。当時の資本主は，自分の営業上の諸問題にみずから直接に交渉をもつていたから，元帳の損益勘定をときどき計算するだけで充分用がたりたのである。このことは，「定期決算」や収益・費用の期間配分を今日ほど重視しなかつたことを意味するものである[8]」。

「定期決算とか損益配分とかの問題に関心をむけるようになつたとき，ここに当然「理論問題」がおこつてきたのであつた[9]」。

「さらにまた，株式会社企業の発達が会計理論の発展にいくたの重要な刺戟をあたえた。近世の会社企業における所有の分散と責任の有限とは，むかしの人のみたこともないほど，会計のになう機能を重くするにいたつた。たとえば，株式会社における資本配当禁止の問題は，期間利潤の決定にからんでいくたの重要な会計理論を生ぜしめたのである[10]」。

2）　なお，会計が簿記よりも広く捉えられ，簿記が会計の構成要素として捉えられており，ただし，これは論理的には（後述されるような）会計とは関係のない簿記の存在を否定するものではないが，しかし，少なくともここでのペートンにはそうした考えはない。

3）　A. C. Littleton, *Accounting Evolution to 1900*, 2nd ed., 1966, p. 163.

4）　リトルトン／片野一郎（訳），清水宗一（助訳）『会計発達史（増補版）』1978年，253頁。

5）　同上，255頁。

6）　同上，118頁。

7）　同上，128頁。

8）　同上，129頁。

9）　同上，129頁。

「新しい時代は新しい事態を発生させ，これにともなつて簿記にも若干の変化が生ずるのをまぬがれなかつたのである。われわれは現代の会計が十五世紀の簿記といかに異なつているかを述べることもできよう。現代の会計分野が，むかしにくらべて，いかに広いかを述べることもできよう。また，会計における諸定義や諸概念が，いかに洗練されたかを述べることもできよう。だが，一団の理論をのぞけば，基本構造に対しわれわれが新たに附加したものとてはほとんど無いといつても過言ではない。この事実は一般に充分に理解されていない点である。監査技術，原価計算技術，予算技術以外には実際的方面に現代が貢献し得たところは比較的すくないといえよう。しかも，これらのものは現代のなした貢献として最上最大のものであるが，その全部を以てしても真の貢献としてはむかしの第一段階に比肩し得ないのである[11]」。

複式簿記という記録システムそれ自体の構造はすこぶる完成度が高く，したがって，何百年の時が経とうとも改変や進化の必要がなかったが，複式簿記の成立時にはなく，のちに生成をみたものに理論と財務表があり，この両者は，財務表の登場が理論を必要とした，という関係にある，ということであり，ただしまた，複式簿記成立の意義は擢んでて大きい，ということである。

次に「後篇　簿記より会計学への発展」は次のように述べている。

「簿記は十九世紀に入るとさらに一段と発展すべき環境におかれるにいたつた。産業革命にひき続いて私的企業の目ざましい勃興をみるにいたつた十九世紀は，実に商業的にも工業的にも金融的にも，また，法律的にも大躍進の時代であつた。簿記をとりまく各種の外部的与件は，これまで単なる組織的記録方法としてとどまつていた簿記を発展せしめて，企業経営上の管理手段たらしめる力をもつていた。いいかえれば，十九世紀にいたつて簿記は会計 accounting に発展したのである[12]」。

「簿記から会計への発展について株式会社が大きな影響をあたえたことは見のがし得ない事実である。……株式会社は継続企業であり，したがつて，株式によるその投下資金は一回の配当によつて全損益が分配されるところの投機 venture ではなくて，定期に果実が得られるところの長期投資 investment であるという事実こそが，簿記に決定的な影響をおよぼした所以であつたのである。株式会社が定期的果実を分配することを目標として存立するものであるとすれば，会社の資本 capital であるものと収益 income であるものとをつねにはつきり区別しなければならない。資本と収益との区別を表示し得る能力は，複式簿記のもつ一の技術的特質であり，しかして定期的利益を正確に計算することは会計の一の重要な職能である。それゆえに，株式会社が資本と収益とを区別することの重要性を強めたかぎりにおいて，それはまた，簿記から会計への発展をそれだけ刺戟したのであつた[13]」。

10） 同上，129～130頁。
11） 同上，131頁。
12） 同上，255頁。

「会計を簿記からはつきり区別すべき一つの規範は会計監査である[14]」。

「原価計算は複式商業簿記が数百年の歴史をもつのにくらべれば，それほど古いものではなく，その起源はごく最近のことに属する。的確にいえば，それは十九世紀の産物であり，二十世紀に入つてから急速な伸展をとげてきたのである[15]」。

「原価計算は，或る意味において，従来の簿記にまつたく新しい要素をみちびき入れたものといえる。十五世紀において複式記入の方法による簿記が形成されたことと，二十世紀において予算が創始されたこととの中間に現われたきわめて重要な一つの特色は，財貨の取得価額を基準とする価格の形成ということが簿記に導入されたことであつた。それ以前においては，生産原価の形成を簿記にむすびつけるという要求はまつたく起らなかつた[16]」。

株式会社を含む19世紀の状況が会計をもたらした，ということである。

「光ははじめ十五世紀に，次いで十九世紀に射したのである。十五世紀の商業と貿易の急速な発達にせまられて，人は帳簿記入を複式簿記に発展せしめた。時うつつて十九世紀にいたるや当時の商業と工業の飛躍的な前進にせまられて，人は複式簿記を会計に発展せしめたのであつた[17]」。

簿記と会計の異同――記録と報告

簿記と会計の異同ないし簿記と会計の関係についてはつとに色々なことがいわれており，その一つに「決算の前までが簿記で，決算以降が会計」といったものが挙げられる。

簿記論や会計学の入門的なテキストには「簿記一巡の手続き」などというタイトルの下の**図**のような図が載っているが，これを参照しつつ如上の関係を考えれば，企業等における経済事象を「取引」という概念をもって捉え，これを仕訳帳に記録し，元帳に転記するという日々の手続きが簿記で，期末の財務諸表の作成にいたる決算手続き以降が会計，ということとなろう（「簿記一巡の手続き」というタイトルからすれば最初から最後まで簿記ではないか，という揚げ足取り的な話はさておく）。

図　簿記一巡の手続き

取引 ―（仕訳）→ [仕訳帳] ―（転記）→ [元　帳] ―（決算手続き）→ [財務諸表]

例えばE. L. コーラーの *A Dictionary for Accountants* は「bookkeeping　簿記」について「(a) 企業を秩序正しく管理しうる手段を提供し，かつ (b) 企業の財政状態と経営成績を記録し報告す

13）同上，308～309頁。
14）同上，371頁。
15）同上，437頁。
16）同上，437頁。
17）同上，498～499頁。

るための基礎を確立するために，予め考えた計画にしたがって，取引を分析・分類・記録するプロセス[18]」とし，他方，「accounting　会計」については「取引 transaction を記録し報告すること[19]」としている。

また，例えば「両者の言葉の相違から，最も単純に整理して説明するとすれば，簿記（bookkeeping）とは，「帳簿（book）に［取引を］記録する（keep）行為（ing）」であり，会計（accounting）とは，「［１年間で得た利益を株主に］説明する（account）行為（ing）」ということになる。……ごく単純にいえば，簿記の中心は，記録であり，会計の中心は，伝達である[20]」とされ，あるいは「報告機能を含めるかどうかが，ある意味では，簿記と会計とを分ける分水嶺になるのかも知れない。なぜなら，会計は，まさしく利害関係者に企業の財政状態や経営成績を説明ないしは報告する行為であるからである[21]」とされるように，簿記という行為はこれがまずは「記録」行為として捉えられるのに対し，会計という行為は「説明」行為ないし「報告」行為ないし「伝達」行為として捉えられよう[22]が，「説明」ないし「報告」ないし「伝達」は財務諸表をもって行われ，また，既に指摘したように，リトルトンは，先の引用文において，「パツィオロ時代」にはみられず，現代にはみられるものとして「理論」と「財務表」を挙げている。

簿記と会計の異同――技術と理論

他方，ときに「簿記は技術で，会計は理論」などともいわれ，しかし，簿記も会計も行為であることからすれば，これについては違和感を覚えようし，また，「簿記は技術」はまだしも，「会計は理論」にはまずは次元の違いの感を禁じえない。しかしながら，リトルトンは，これも先の引用文において，「財務表の問題」，すなわち「定期決算とか損益配分とかの問題」が「理論問題」をもたらした，としており，つまるところ，［簿記 → 会計］は財務諸表の登場を意味し，財務諸表は理論を必要とした，ということだろうし，また，リトルトンが「簿記より会計（Accounting）への発展」ではなくして「簿記より会計学（Accountancy）への発展」としていることにもそうした含意が看取される。

ただしまた，直上では，会計は行為であって，したがって，「会計は理論」にはまずは次元の違いの感を禁じえない，とはしたものの，考えてみれば，行為というものは，多くの場合，知識や思考をもって行われており，このことに鑑みれば，体系的知識（理論）やこれを求める営み（学問）はこれらを当該行為（例えば会計という行為）に包摂されたものとして捉えることもでき，そうした場合には例えば会計と会計理論ないし会計学の峻別に拘泥することは必要でなくなるかもしれない。

そうした峻別には拘泥していないようにみえるものとしては，例えば武田隆二の次のような記述を挙げることができる。

18）コーラー／染谷恭次郎（訳）『会計学辞典』1973年，70頁。
19）同上，８頁。
20）渡邉泉『会計の歴史探訪――過去から未来へのメッセージ』2014年，185頁。
21）同上，188頁。
22）ただし，「報告」を簿記に含める定義（後出）もある。

「簿記と会計とは，どのような点で区別される学科であるのか[23]」。

「歴史的に考察すると，帳簿記入の対象は金銭の貸借関係の記録に始まっている。金銭の出納とか，債権・債務の発生・消滅の記録が，帳簿記入の主たる対象であった時代においては，貨幣の動きと債権・債務の変動をいかに明瞭かつ確実に把握するかということが関心の中心となっていた。いいかえるならば，記帳技術もしくは記録形式の研究に第一義的課題があったとみてよかろう。ということは，会計の歴史は簿記史として始まったのである[24]」。

「しかし，その後，企業規模が拡大し，企業活動が多方面にわたるようになると，帳簿記入の対象も著しくその範囲を拡大した。債券・債務や貨幣以外に商品（たな卸資産）や建物（固定資産）の記録をも含むようになると，ここに新しい問題領域がつけ加わった。それは評価の問題である。……いずれの価格で……評価したらよいのかとか……どれだけの減価（価値の減少）が生じたのか，という問題に対しては，記帳技術の学として成立した簿記の知識では答えられなくなった。ここに新たな領域として，評価論が成立する。かくて，近代会計学の歴史は，評価論に始まったといってもさしつかえない。……発生史的にみて，簿記は記帳技術論として，また，会計は評価論として，それぞれの１ページが開かれたものであった[25]」。

また，武田は次のようにまとめている。

「簿記は，簿記システムを通じ，利害関係者が必要とする会計情報を財務諸表として作成するための技術である。これに対し，会計は企業内に生起した経済事象を簿記システムにインプットすべきかどうか，あるいは，インプットするとしてそれを貨幣金額でいかに評価するか等を決定する行為を対象とする。それゆえ，簿記学は記帳技術論であるのに対し，会計学はその認識対象の内容の大きさを決定する評価論としての性格を持っている[26]」。

しかしながら，「簿記は……するための技術である」と「会計は……する行為を対象とする」の間のちぐはぐさはやはり気になる。

会計とは関係のない簿記[27]

ところで，如上の議論においては前出の**図**ないし「簿記一巡の手続き」というそのタイトルに問題がなくもない。

叙上のように，簿記はまずは「記録」であり，いま少し限定すれば，「財産に関する記録」で

23）武田隆二『簿記Ⅰ――簿記の基礎』1978年，４頁。
24）同上，５頁。
25）同上，５頁。
26）武田隆二『簿記一般教程（改訂版）』1983年，５頁。
27）注記２）をみよ。

ある。また，会計的な言い方をすれば，簿記が記録するのは「取引」であり，ここにいう「取引」とは資産，負債，ないし資本の増加ないし減少をもたらす事象のことであり，簡単にいってしまえば，財産の増減をもたらす事象のことである。

というわけで，簿記は取引を記録，すなわち財産の増減をもたらす事象を記録するが，そうした簿記のそもそもの目的は「財産の管理」にある，として捉えることもできよう。すなわち，財産を管理するために，財産の増減をもたらす事象を記録する，ということである。

そうした捉え方をした場合には，簿記は何も財務諸表の作成のためにあるというわけではない，ということにもなろうが，しかしまた，他方，簿記が財務諸表の作成に用いられている，ということは事実である。

したがって，通常，会計学や簿記論のテキストの類いでは，簿記は，会計のためのもの，として捉えられ，別言すれば，簿記は，財務諸表の作成プロセス，として位置づけられ，さらに別言すれば，あたかも，財務諸表の作成こそが簿記の目的，といったように捉えられており，前出の**図**はそうした捉え方を表しているといえようが，ただし，「簿記一巡の手続き」というタイトルには問題がなくもなく，「財務諸表の作成プロセス」とか，「財務諸表の作成手続き」とかいったタイトルこそが相応しい。

簿記は確かに会計（財務諸表の作成）に用いられているが，あくまでも，用いられている，にしか過ぎず，別言すれば，簿記というものは会計のために行われるようになったわけではない。

前述のように，簿記を「財産に関する記録」とするならば，そうした「記録」は何も会計を前提にしなくとも行われ，また，これも前述のように，簿記のそもそもの目的は財産の管理にあるとした場合，すなわち，財産を管理するためにそれに関して記録する，とした場合，そうした「記録」は会計の必要がないような状況，すなわち，財務諸表をもってする「説明」の必要がないような状況，すなわち，例えば資本と経営の分離が生じていないような状況においても行われることとなる。

簿記と会計の異同――技術と理論（続）

閑話休題。「「会計＝理論面，簿記＝技術面」とか，「会計＝内容，簿記＝形式」とかといった表現で，会計と簿記との関係が語られることがある。しかし，こうした抽象的な表現によって，簿記（論）と会計（学）との実相がどの程度明らかになったのであろうか[28]」ともされるが，そうした表現の代表としてしばしば引かれるのが岩田巌による次のような主張である。

> 「会計が実質的な内容を有する記録計算であるに対して，簿記はむしろ無内容に近い形式的な記述の仕方にすぎない。会計は簿記の内容であり，簿記は会計の形式である[29]」。

これについては「そうした表現は例えば岩田理論においても用いられているが，そこで現実に

28） 笠井昭次「会計（学）と簿記（学）との関係を巡って」『三田商学研究』第36巻第５号，1993年，59頁。
29） 岩田巌『利潤計算原理』1956年，22頁。

意味されていることは，現に存在する複式簿記機構によって会計本来の構造を見誤ってはならない，ということにすぎないようである。……つまり，計算の本質的仕組みをまず想定し，それにそぐう複式簿記の機構を構築するべきであり，その逆であってはならないというのが，岩田理論における「会計＝内容面，簿記＝形式面」という表現の含意であると思われる[30]」ともされているが，他方，岩田は次のように続けている。

> 「歴史的にみれば，両者は密接にむすびついて発生し，たがいに相関連しつつ発達してきたのである。あたかも影の形にそうように，会計のあるところには簿記があり，簿記があるところには会計があつて，簿記をはなれて会計を考えることはできないといつても差支えない。企業会計と複式簿記の関係においてはとくにそうである。……だが，それにもかかわらず，会計の記録計算手続と簿記の記録形式とは，少なくとも観念的には区別すべきであつて混同してはならない[31]」。
>
> 「会計という手続は，別に特定の記録形式をそのうちに包摂するものでもなければ，指定するものでもない。その結果計算と原因記録を行うのに，簿記の勘定形式を用いなければならない理由はない。……通常は簿記の勘定形式を用いるのが一般の慣習であるが，これは単に記録を整理し，計算を正確ならしめるに便宜であり，効果があるからにすぎない[32]」。

これは要するに，会計に簿記は必須ではない，ということであって，また，ここには，既に言及された「会計とは関係のない簿記」の存在も含意されているのかもしれないが，けだし，こうした捉え方は少数派というべきであって，むしろ，次のような捉え方が一般的だろう。

> 「「会計」（accounting）の根源を，歴史的観点から，「財の記録とそれに基づく管理」と見なせば，「簿記」（bookkeeping）とは「会計に固有の記録・計算のためのツール」と定めることができるであろう[33]」。

要は，簿記は会計に固有，ということにほかならないが，なおまた，ここでは（「根源」という微妙な表現が「定義」を意味するものかどうかは定かでないが）会計の定義（らしきもの）に「管理」を含めている点に違和感がある。

閑話休題。「「会計＝理論面，簿記＝技術面」とか，「会計＝内容，簿記＝形式」とかといった表現」に話を戻せば，簿記論の大家として知られる沼田嘉穂の次のような指摘が興味深い。

> 「見方によつては簿記は記帳する取引金額が定められてからの処理であり，記帳金額の決

30）笠井「会計（学）と簿記（学）との関係を巡って」59～60頁。
31）岩田『利潤計算原理』22～23頁。
32）同上，23頁。
33）中野常男「「会計」の起源と複式簿記の誕生」中野常男，清水泰洋（編著）『近代会計史入門』2014年，3頁。

定の根拠並びにその計算自体は会計学または商業数学の範囲であり，簿記自身の任務ではない，という考え方が成り立つ[34]」。

また，如上の沼田説に依拠した次のような捉え方も注目されよう。

「発生主義の原則や実現主義の原則にもとづいて経済状態の変動を認識し，ついで，その形態や性質に応じてこれを分類するとともに貨幣を測度として数量化する。この三つの段階を前段階として，簿記の領域が展開される，とみることができる[35]」。

これは，認識および測定の２段階を経て「内容」が定まるが，簿記はそれに関知することなく，これを司る「理論」は会計（学）の範疇にある，ということだろうが，前出の武田のちぐはぐな記述も要はそういうことなのだろうか。

簿記の定義

順序が逆かもしれないが，ここで簿記の定義を，例えば英米日のテキストの類いについて概観してみよう。

「簿記は，いつでもその性質や影響をはっきり確かめることができるように，或る主体の商取引を適当な方式で記録する技術（art of recording）である[36]」。

「簿記は，そのために用意された帳簿に，商取引を体系的に記録することである。適切な簿記は事業に関して必要な財務情報を直ちに経営者に提供するが，そうした簿記は適切な組織的方法（good system）と有能な簿記係によってもたらされる[37]」。

「「簿記」には沢山の定義があるが，しかし，とても広く多様な意味を有するこの用語の正しい意味を僅かな言葉で説明することは難しい[38]」。

「今日の英語辞典は「簿記」を「金銭取引や商取引を規則的で組織的に（in a regular and systematic manner）記録する技術（art of recording）」と定義しているが，しかし，実務家はこの用語を，単に組織的方法による取引の記録としてではなく，もっと多くの意味を有するものとして理解している。すなわち，この用語には，そうした記録は継続的に行われるべきことが含意され，また，取引の詳細は，所定の期間に行われた (a) 個々の取引，

34） 沼田嘉穂『簿記論攻』1961年，11頁。
35） 森藤一男「複式簿記の構造と職能――会計と簿記の区別を中心として」『産業経理』第39巻第６号，1979年，83頁。
36） L. Cuthbert Cropper, *Elementary Book-Keeping: A Text-Book for Beginners*, 1913, p. 1.
37） James A. Lyons and Oliver S. Smith, *Bookkeeping and Accounting*, c1922, p. 5.
38） B. G. Vickery, *Principles and Practice of Book-Keeping and Accounts*, 6th ed., c1930, p. 1.

(b)同種の諸取引，および(c)すべての取引の貨幣的な側面が最小限の支障や遅滞をもって確かめられるように，整理されるべきことが含意されている[39]」。

「簿記は「商取引の貨幣的な側面を体系的に継続的に記録する技術（art of permanently recording）である[40]」」。

「簿記（bookkeeping）とは……特定の経済主体の営む経済活動を貨幣価値により記録・計算し，その結果を整理・要約して関係者に報告する技術であるということができる[41]」。

「簿記とは，「特定の経済主体の経済活動を主として貨幣額によって，記録・計算し，一定期間ごとに整理・要約する技術である。」と定義される[42]」。

「簿記（Bookkeeping）とは……企業における現金・財貨・債権・債務の増減・変化とその原因を，一定の方式をもって記録・計算・整理する方法である[43]」。

「簿記というのは，ある主体の経済的な活動のすべてを客観的な証拠に基づき，秩序正しく貨幣数値を用いて記録し，それらの活動の成果と現状を明らかにするための計算と記録の知的な技術である[44]」。

「簿記とは，経済主体の経済活動を，一定の形式を備えた会計帳簿に，固有の方式で記録・計算する手続の体系である[45]」。

「まったく無意味」

以上のうち，特に注目されるのは「記録・計算し，その結果を整理・要約して関係者に報告する技術である」とする森川八洲男の定義であり，また，「もし，簿記を，企業間の商取引を記録し，その記録にもとづいて一年間の期間利益を計算し，その結果を記帳係や代理人が事業主にあるいは事業主が出資者や債権者に報告するプロセスであると規定するならば，それは複式簿記以外の何物でもない[46]」としつつ，自らこの定義を支持する[47]渡邉泉の立場もこれと同様といえよう。

39） *Ibid.*, pp. 1–2.
40） R. Glynne Williams, *Elementary Book-Keeping*, 2nd ed., c1930, p. 2.
41） 森川八洲男『精説簿記論〔Ⅰ〕』1984年，3頁。
注記22）をみよ。
42） 榊原英夫『簿記と会計』1990年，3頁。
43） 染谷恭次郎『最新精説簿記（改訂版）』1992年，2頁。
44） 瀧田輝己『簿記学』2002年，3頁。
45） 照屋行雄『現代簿記の原理』2014年，5頁。
46） 渡邉泉「単式簿記と複式簿記の関係――複式簿記は単式簿記から進化したのか」『會計』第182巻第5号，2012年，121頁。

ただし，これらは「もしも簿記を可能な限り広義に捉えるならば，これらの語はほぼ同義となる」とするペートンをして「まったく無意味」と断じさせるものにほかならない。

文　献

L. Cuthbert Cropper, *Elementary Book-Keeping: A Text-Book for Beginners*, Macdonald & Evans, 1913.
岩田巌『利潤計算原理』同文舘出版，1956年。
笠井昭次「会計（学）と簿記（学）との関係を巡って」『三田商学研究』第36巻第５号，1993年。
コーラー（Eric L. Kohler）／染谷恭次郎（訳）『会計学辞典』丸善，1973年。
A. C. Littleton, *Accounting Evolution to 1900*, 2nd ed., Russel & Russel, 1966.
リトルトン（A. C. Littleton）／片野一郎（訳），清水宗一（助訳）『会計発達史（増補版）』同文舘出版，1978年。
James A. Lyons and Oliver S. Smith, *Bookkeeping and Accounting*, Lyons & Carnahan, c1922.
森川八洲男『精説簿記論〔Ⅰ〕』白桃書房，1984年。
森藤一男「複式簿記の構造と職能――会計と簿記の区別を中心として」『産業経理』第39巻第６号，1979年。
中野常男「「会計」の起源と複式簿記の誕生」中野常男，清水泰洋（編著）『近代会計史入門』同文舘出版，2014年。
沼田嘉穂『簿記論攻』中央経済社，1961年。
William Andrew Paton, *Accounting Theory: With Special Reference to the Corporate Enterprise*, Ronald Press, 1922.
榊原英夫『簿記と会計』同文舘出版，1990年。
染谷恭次郎『最新精説簿記（改訂版）』成文堂，1992年。
武田隆二『簿記Ⅰ――簿記の基礎』税務経理協会，1978年。
武田隆二『簿記一般教程（改訂版）』中央経済社，1983年。
瀧田輝己『簿記学』同文舘出版，2002年。
照屋行雄『現代簿記の原理』中央経済社，2014年。
友岡賛「単式簿記と複式簿記」『三田商学研究』第57巻第３号，2014年。
B. G. Vickery, *Principles and Practice of Book-Keeping and Accounts*, 6th ed., Donnington Press and Gregg Publishing, c1930.
渡邉泉「単式簿記と複式簿記の関係――複式簿記は単式簿記から進化したのか」『會計』第182巻第５号，2012年。
渡邉泉『会計の歴史探訪――過去から未来へのメッセージ』同文舘出版，2014年。
R. Glynne Williams, *Elementary Book-Keeping*, 2nd ed., Donnington Press and Gregg Publishing, c1930.

2014年12月27日成稿

47）友岡賛「単式簿記と複式簿記」『三田商学研究』第57巻第３号，2014年，27頁。